

# 26P-pm233

理礼氏薬物学（第十三巻）にみる薬物

○宮本 如奈<sup>1</sup>、島 和嗣<sup>2</sup>、久保 光平<sup>3</sup>、畠山 貴博<sup>4</sup>、大垣 旭<sup>5</sup>、小松 知貴<sup>5</sup>、  
澤田 采佳<sup>6</sup>、小松 直登<sup>7</sup>、木村 壮太郎<sup>8</sup>、林 優樹<sup>15</sup>、西野 ゆり<sup>9</sup>、菰田 綾香<sup>11</sup>、  
西野 正雄<sup>10</sup>、高倉 弘士<sup>12</sup>、畠山 有理<sup>13</sup>、畠山 光弘<sup>14</sup>（<sup>1</sup>同志社大学（文）、<sup>2</sup>府立金  
剛高校、<sup>3</sup>四天王寺羽曳が丘高校、<sup>4</sup>初芝富田林高校、<sup>5</sup>府立河南高校、<sup>6</sup>府立西浦高校、  
<sup>7</sup>府立東住吉高校、<sup>8</sup>府立藤井寺高校、<sup>9</sup>府立長野高校、<sup>10</sup>早稲田大学（基幹理工）、<sup>11</sup>関  
西福祉科学大学、<sup>12</sup>立命館大学（産業社会学）、<sup>13</sup>長崎大学（薬）、<sup>14</sup>畠山獣医科、<sup>15</sup>府立  
富田林高校）

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十三巻全文を解説し紹介する。

「内容」・・巻十三巻では下薬を扱っている。タマリンドウ、マンナ、カッシア、オリーブ油、ヒマシ油、大黄（大黄浸、大黄チンキ、大黄加センナチンキ、大黄酒、大黄糖煉、芳香大黄糖煉、大黄アルコールエキス、大黄流動エキス、大黄丸、複方大黄丸、複方大黄散）、センナ（センナ浸、センナ糖煉、センナ流動エキス）、カッシア・マリランジカ、胡桃根皮（胡桃根皮エキス）、蘆薈（アロエ）（精製蘆薈、蘆薈チンキ、蘆薈浸薬チンキ、蘆薈酒、蘆薈丸、蘆薈阿魏丸、蘆薈乳香丸、蘆薈浸薬丸、蘆薈桂皮丸）、ヤラップ（ヤラップ脂、ヤラップエキス、ヤラップチンキ、複方ヤラップ散）、ポドヒリウム（ポドヒリウム脂、ポドヒリウムエキス）、スカムモヌウム（スカムモヌウム脂）、コロシント（コロシントアルコールエキス、複方コロシントエキス）、藤黄（複方下泄丸）、エラテリウム、巴豆油、黒藜蘆（黒藜蘆アルコールエキス、黒藜蘆チンキ）、レプタンドラ、硫黄（硫黄軟膏、沃顔硫黄、沃顔硫黄軟膏）、マグネシア（煨化マグネシア）、炭酸マグネシア（クエン酸マグネシア水）、硫酸マグネシア（瀉利塩）、硫酸ソーダ（芒硝）、燐酸ソーダ、硫酸ポトアス（孕礬酒石）、重酒酸ポトアス（純精酒石）、酒酸ポトアス、酒酸ポトアス加ソーダ（ロセルレ塩）、軽瀉沸騰散（セードリック散）

「考察」・・作用は幾つかあるとして、植物下薬と、無機化合物の薬剤が説明されているが、翁埜兒暴瀉、刺抜兒、芒硝、硝石、越弗尊曾屋度、翁埜兒曾屋度、接骨木皮 等が含まれず、作用の強弱の記述が乏しいと言える。